

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-21

## 大学生の時間の使い方の違いによる職業，学業，自己に対する意識の差異

田澤，実 / UMEZAKI, Osamu / TAZAWA, Minoru / MINEO, Naoko  
/ 梅崎，修 / 峰尾，菜生子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン：法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

33

(終了ページ / End Page)

57

(発行年 / Year)

2011-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007601>

# 大学生の時間の使い方の違いによる 職業、学業、自己に対する意識の差異

中央大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程 峰尾 菜生子

法政大学キャリアデザイン学部助教 田澤 実

法政大学キャリアデザイン学部准教授 梅崎 修

## 1. 問題と目的

現代の大学生の学生生活は、多忙化してきていると言われている。溝上 (2004) によれば、最近の学生は授業に足繁く出席し、それ以外のサークル活動、アルバイト、ボランティア活動やインターンシップ、趣味や遊びなどさまざまな活動にも余念がないという。法律家や公務員、会計士などを目指して予備校に通ういわゆる「ダブルスクール」なども含めると、大学生が日々の生活のなかで行う活動は多岐にわたっているといえるだろう。

近年、大学生の生活に関してよく指摘されているのは、学生の授業出席率が上昇してきていることである。文部科学省や大学自身が授業に力を入れるよう動いている面もあるが、授業担当の教員に「出席をとってください」と自ら要望を出す学生も少なくないという。溝上 (2004) は、このような「学業中心型キャンパスライフへの転換」は、1990年代以降の経済状況の悪化に伴う就職状況が影響していると指摘する。一時期は1947～49年頃に生まれた「団塊の世代」が定年退職する「2007年問題」の影響もあり、学卒者の就職状況も改善傾向にあった。しかし、2008年の「リーマン・ショック」以降、再び就職状況が悪化してきている。このような状況下で、大学においても様々な進路に関する支援、キャリア教育が行われている。たいていの学生は大学3年の秋から大学4年にかけて就職活動を行う。その間は大

学にもともに通えず、何十社もの企業を回る学生もおり、卒業論文にかける時間が無くなってしまふというケースもある。最近では、経団連など学卒者を採用する経済界の側からも就職の早期化を避けるべきであるという声が出始めているが、不安定な経済状況の下では、進路選択について低学年のうちから必要以上にせせりを感じてしまう学生は決して少なくないであろう。「学業中心型キャンパスライフ」を志向する学生は増加の一途をたどるのではないだろうか。

授業の出席率が上がる一方で、「大学での勉強が何の役に立つのか」という疑問をもつ者も多いとされる (溝上, 2006)。古典哲学のような教養の授業ではなく、社会に出てからも通用するような、より実践的、専門的な力がつくような授業をしてほしいという学生がどの大学でも増えてきているのだという。この背後には、「やらなきゃいけないことはいっぱいあつてただでさえ時間が少ないのだから、ムダになるようなことはなるべくしたくない」という気持ちもあるのだろう。今の社会では、効率よく行動して結果を出すことに価値が与えられており、時間の効率概念に脅かされずに疑問を自覚し、納得がいくまで反芻し続けるということが難しい (馬場, 2004)。入学してすぐに資格取得のための講座に参加するといった新入生の姿にもそのような様子が垣間見える。

冒頭で取り上げたように、今の学生は授業にしっかり出席し、授業が終わればアルバイトに、資格取得のための予備校にと、忙しい毎日を送つ

ている。今の大学生にとっては、限られた時間を何にどれだけ費やすか、どのように分配するかが、より大きな課題となっていると考えられる。人間は、自分が体験する時間の流れに意味ある区切りをつけて分節化する（浜谷，2004）。浜谷（2004）によれば、この分節化の仕方は、個人と他者や社会との関係の切り結び方にかかわり、個人的な時間の過ごし方や社会的な状況が個人に及ぼす影響によっても異なってくるという。この点からも、今の大学生の時間の使い方を研究の中心に据えてみる意義があると考えられる。そこで本稿では、今の大学生がどのように大学生活を過ごしているかについて、時間の使い方という観点から分析を試みる。

時間の使い方に関しては、ベネッセ教育研究開発センター（2009）やNHK放送文化研究所（2006）などが大規模な実態調査を行っている。生活時間に関するこれらの調査は、人々がどのような活動にどのくらいの時間を費やしているかについてさまざまな示唆を与えてくれるものである。しかしながら、諸活動に費やす時間がその個人の意識とどのように関わっているのかについては、まだ研究が十分にされていない。先に述べたように、一人一人の大学生は限られた時間を自分なりに配分して、多彩な活動を行っている。個々の大学生の現状を把握するうえでも、時間の使い方とそれにさまざまな意識がどのように関わっているかを明らかにする必要があるといえる。

大学生の時間の使い方には、特にどのような意識が関わっていると考えられるだろうか。

まず、挙げられるのが職業や学業への意識である。大学生の時間的展望の一般的な傾向は、未来志向的で将来目標への強い欲求に支えられているという（都筑，1999）。先述したように、特に近年の大学生にとっては、大学を出てからどのような進路を歩むのかを早いうちから考えなければならぬ状況となっている。日々の時間の使い方と将来展望との関係がより強まっている可能性があると考えられる。進路選択に際しては、自分が就きたい職業について考えるだけでなく、そこにた

どり着くためのスケジュール管理や計画性も求められる。これには大学生活を通じてどのような能力が伸びると捉えているのかという意識も重要になるであろう。進路・将来の生活を展望するうえでも、大学生活のなかの時間をいかに使うかは重要になってくる。時間の使い方は、大学生が進路についてどのように考え、どのような進路に関わる行動をとっているかについての指標の一つとなると考えられる。

第二に、自己評価・自己認識などの自己についての意識である。進路は今後の自分を展望するものであるが、時間の使い方は未来のことだけでなく、過去の自分、それまでの自分にもかかわっているだろう。それまでの経験のなかで認識されてきた自分の性格、自分が得手・不得手としているもの、好き嫌いなどによって、個々人が諸活動に費やす時間は異なると考えられる。どのような活動にどのくらいの時間を割くかは、自己形成にもかかわるとされる。浜谷（2004）は、「熱中し没頭する時間・冷静に計画する時間」「自分の世界に沈潜する時間・周囲に開かれつながつている時間」というように、一見、相矛盾する時間を往来することが人間の成長につながっているととらえている。

このような先行研究からの示唆をまとめると、大げさな表現になるが、日常生活における時間の使い方そのものに、その個人の過去や未来が投影されうるといえるだろう。

大学生を支援するという観点からも、大学生の時間の使い方とさまざまな意識にどのような関係があるのかを検討していくことには意義があると思われる。「優先順位をつける」「隙間時間を活用する」といったことは時間管理のテクニックとしてよくいわれることだが、時間の使い方を改善することで自分の気持ちに余裕が出てくるという面もある。時間の使い方を把握することは、大学生が生活のなかのどのような点で問題を抱えやすいのか、それを改善するにはどのような支援が求められるのかにもつながるであろう。そこで、本研究では大学1年生に焦点を当てる。野々村（2001）

は、1年次の大学生が達成すべきキャリア発達課題として、①自己の進路適性、大学等への進学目的、入学した学部・学科・課程などを、自己の進路計画に照らして総合的に検討すること、②大学等における生活と勉学の目標について暫定的計画を立てること、③大学生生活への適応に務めることをあげている。すなわち、大学1年生における課題とは、大学生生活を有意義に過ごすことに注目されていると言えるであろう。上述したように、時間の使い方という観点から大学生の進路や自己に対する意識について分析していくことは、意義があると考えられる。

そこで本稿では、時間の使い方の違いによって、職業、学業、自己に対する意識が異なるのかどうかを検討することを目的とする。具体的には、大学生活における諸活動の時間の使い方によって、将来の職業生活について考えていること、就職先を決定する際に重視すること、大学生生活を通じて身につくと思う資質・能力、自尊感情、周りの人々から認知されていると思う自分の性格の各尺度の得点に差がみられるのかどうかを明らかにする。

本稿では、まず予備的な分析結果として、大学生活における時間の使い方の記述統計、時間の使い方による群分け、従属変数として取り扱う尺度の因子分析、対象者全体の尺度得点の平均等を示す。次に、主目的である、時間の使い方の違いによる大学生活を通じて身につくと思う能力、職業に対する意識、自己評価の差異を明らかにする。最後に、本研究の結果を踏まえての考察と今後の課題について述べる。

## 2. 方法

対象者：都内私立四年制大学の大学1年生 269名  
(男性107名、女性161名、不明1名)であった。

調査時期：2008年1月であった。

調査手続き：対象者の学部の必修授業の時間を用いて質問紙調査を行った。

調査内容：以下のような質問項目を設けた。

①1日における時間の使い方：「あなたの大学生活における時間の使い方について、以下の各項目の合計が24h(時間)になるように数字を割り振って、お答えください(一般的な1日についておおよそのくらいかをお答えください)」という教示文によって尋ねた。項目は、「大学にいる時間(通学時間含む)」、「家で勉強している時間」、「家で家族と過ごす時間」、「アルバイトをしている時間」、「サークル等で活動している時間」、「友達と遊んでいる時間」、「部屋で一人で過ごす時間」、「その他の時間」を設けた。

②将来の職業生活についての考え：「あなたは、将来の職業生活について、どのように考えていますか」という教示文により、後述の表の20項目を尋ねた。「そう思う」～「そう思わない」の4件法で尋ねた。

③就職先を決定する際に重視すること：「あなたが将来、就職先を決定する際に重視することは何ですか」という教示文により、後述の表の17項目を尋ねた。「とても重視する」～「全然重視しない」の5件法で尋ねた。

④大学生活を通じて身につくと思う資質・能力：「あなたは、大学生活を通じて、次のような資質・能力がどの程度身につくと思いますか。あてはまる箇所に○をつけてお答えください」という教示文により、後述の表の24項目を尋ねた。「とても身につくと思う」～「全然身につくと思わない」の4件法で尋ねた。

⑤性格の認知(周りの人々からどのように思われていると思うか)：「あなたは、周りの人々からどのように思われていると思いますか。以下のそれぞれの項目について、最もあてあまると思うところに○をつけてください」という教示文により、性格を表す形容詞15項目を尋ねた。「かなりそう思われている」～「全くそう思われていない」の5件法で尋ねた。

⑥自尊感情：山本・松井・山成(1982)が邦訳したRosenberg(1965)の自尊感情尺度の10項目を用いた。この尺度は、「自分に対して肯定的

である」などの項目が含まれており、自分に対してこれでよいと感じるような自分自身に対する肯定的感情の程度を測定するとされている。「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で尋ねた。

統計分析：統計ソフト SPSS16.0 を使用して各分析を行った。

### 3. 予備的な分析

#### 3-1. 大学生活における時間の使い方の記述統計

大学生活におけるそれぞれの時間について、1日あたりの平均等を算出した。その際に、それぞれの項目について「0時間」（その項目について時間を費やしていない）と回答した者が多数いたため、全体の結果のみではなく、「0時間」と回答した者を除いた場合についても算出した（Table 1）。次に、大学生活におけるそれぞれの時間についての度数分布を求めた（Table 2）。全体的には、大学にいる時間が最も多く（ $M=6.86\sim 7.01$ ）、次いで、睡眠時間（ $M=6.01\sim 6.18$ ）、アルバイトをしている時間（ $M=3.62\sim 5.01$ ）という順であった（Table 1）。その他の各活動に費やす時間についてはおおむね2時間程度であったが、家での勉強については1時間程度と、相対的に少なかった。ただし、0時間と回答する者が勉強やサークルにおいては半数以上であり、家族や友達においては3割程度であった（Table 2）。このように、これらの活動を行っていない者が一定数いることには解釈に注意を要する。

#### 3-2. 時間の使い方による群分け

大学生活における時間の使い方の違いによって自己評価や職業意識が異なるのかどうかを検討するために、それぞれの時間の使い方について、人数が全体の約3分の1ずつになるように低群、中群、高群の3群に分けるようにした。3群として

分類するのが困難である場合には、2群として分類することにした。

「大学にいる時間（通学時間含む）」については、0時間以上6時間未満の者を低群（ $n=75$ ）、6時間以上8時間未満の者を中群（ $n=92$ ）、8時間以上の者を高群（ $n=102$ ）とした。

「家で勉強している時間」については、当初、0時間の者を低群（ $n=158$ ）、0.1時間以上2時間未満の者を中群（ $n=102$ ）、2時間以上の者（ $n=9$ ）を高群とした。しかし、この分類では高群がわずか9名となるため、0時間の者を低群（ $n=158$ ）、0.1時間以上の者を高群（ $n=111$ ）とする2群に分けた。

「家で家族と過ごす時間」については、0時間の者を低群（ $n=95$ ）、0.1時間以上2時間未満の者を中群（ $n=83$ ）、2時間以上の者を高群（ $n=91$ ）とした。「アルバイトをしている時間」については、0時間以上3時間未満の者を低群（ $n=84$ ）、3時間以上5時間未満の者を中群（ $n=64$ ）、5時間以上の者を高群（ $n=121$ ）とした。

「サークル等で活動している時間」については、0時間の者を低群（ $n=145$ ）、0.1時間以上3時間未満の者を中群（ $n=76$ ）、3時間以上の者を高群（ $n=48$ ）とした。「友達と遊んでいる時間」については、0時間の者を低群（ $n=90$ ）、0.1時間以上3時間未満の者を中群（ $n=112$ ）、3時間以上の者を高群（ $n=67$ ）とした。

「部屋で一人で過ごす時間」については、0時間以上2時間未満の者を低群（ $n=125$ ）、2時間以上3時間未満の者を中群（ $n=65$ ）、3時間以上の者を高群（ $n=79$ ）とした。「睡眠時間」については、0時間以上6時間未満の者を低群（ $n=72$ ）、6時間以上7時間未満の者を中群（ $n=127$ ）、7時間以上の者を高群（ $n=70$ ）とした。

「その他の時間」については、0時間の者を低群（ $n=138$ ）、0.1時間以上3時間未満の者を中群（ $n=84$ ）、3時間以上の者を高群（ $n=47$ ）とした。

Table 1：大学生生活における時間の平均等

	全体					0時間を除いた場合		
	M	SD	最小値	最大値	度数	M	SD	度数
大学にいる時間（通学時間含む）	6.86	2.38	0	14	269	7.01	2.19	264
家で勉強している時間	0.41	0.56	0	3	269	1.00	0.43	111
家で家族と過ごす時間	1.33	1.54	0	10	269	2.06	1.47	174
アルバイトをしている時間	3.62	2.67	0	12	269	5.01	1.66	194
サークル等で活動している時間	1.19	1.70	0	12	269	2.59	1.64	124
友達と遊んでいる時間	1.55	1.57	0	9	269	2.34	1.37	179
部屋で一人で過ごす時間	1.97	1.70	0	10	269	2.36	1.60	225
睡眠時間	6.01	1.38	0	10	269	6.18	1.56	264
その他の時間	1.23	1.90	0	13	269	2.52	2.05	131

Table 2：大学生生活における時間の度数分布

	大学		勉強		家族		バイト		サークル	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
0時間	5	(1.86)	158	(58.74)	95	(35.32)	75	(27.88)	145	(53.90)
0.1時間～1時間未満	0	(0.00)	23	(8.55)	13	(4.83)	1	(0.37)	1	(0.37)
1時間～2時間未満	2	(0.74)	79	(29.37)	70	(26.02)	0	(0.00)	29	(10.78)
2時間～3時間未満	1	(0.37)	8	(2.97)	37	(13.75)	8	(2.97)	46	(17.10)
3時間～4時間未満	7	(2.60)	1	(0.37)	31	(11.52)	22	(8.18)	22	(8.18)
4時間～5時間未満	15	(5.58)	0	(0.00)	14	(5.20)	42	(15.61)	12	(4.46)
5時間～6時間未満	45	(16.73)	0	(0.00)	5	(1.86)	62	(23.05)	9	(3.35)
6時間～7時間未満	55	(20.45)	0	(0.00)	1	(0.37)	31	(11.52)	3	(1.12)
7時間～8時間未満	37	(13.75)	0	(0.00)	1	(0.37)	10	(3.72)	0	(0.00)
8時間～9時間未満	41	(15.24)	0	(0.00)	1	(0.37)	13	(4.83)	1	(0.37)
9時間～10時間未満	26	(9.67)	0	(0.00)	0	(0.00)	1	(0.37)	0	(0.00)
10時間以上	35	(13.01)	0	(0.00)	1	(0.37)	4	(1.49)	1	(0.37)
計	269		269		269		269		269	

	友達		部屋		睡眠		その他	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
0時間	90	(33.46)	44	(16.36)	5	(1.86)	138	(51.30)
0.1時間～1時間未満	4	(1.49)	7	(2.60)	0	(0.00)	7	(2.60)
1時間～2時間未満	53	(19.70)	74	(27.51)	0	(0.00)	42	(15.61)
2時間～3時間未満	55	(20.45)	65	(24.16)	0	(0.00)	35	(13.01)
3時間～4時間未満	41	(15.24)	37	(13.75)	0	(0.00)	22	(8.18)
4時間～5時間未満	14	(5.20)	21	(7.81)	15	(5.58)	7	(2.60)
5時間～6時間未満	7	(2.60)	12	(4.46)	52	(19.33)	7	(2.60)
6時間～7時間未満	2	(0.74)	4	(1.49)	127	(47.21)	4	(1.49)
7時間～8時間未満	2	(0.74)	1	(0.37)	38	(14.13)	2	(0.74)
8時間～9時間未満	0	(0.00)	2	(0.74)	26	(9.67)	2	(0.74)
9時間～10時間未満	1	(0.37)	1	(0.37)	3	(1.12)	2	(0.74)
10時間以上	0	(0.00)	1	(0.37)	3	(1.12)	1	(0.37)
計	269		269		269		269	

### 3-3. 尺度の構成

従属変数のうち、「将来の職業生活についての考え」、「就職先を決定する際に重視すること」、「大学生活を通じて身につくと思う能力・資質」、「性格の認知」の項目について因子分析を行った。因子分析結果から、因子についての尺度を構成し、該当する項目の得点を合計した上で項目数で除して各因子の尺度得点を求めた。なお、「自尊感情」は、Rosenbergにならない、尺度中の逆転項目は反転させて合計を求めた上で項目数で除して自尊感情得点とした。

#### ①将来の職業生活についての考え

20項目について因子分析（主因子法・Promax回転）を行った。2～5因子設定で因子分析を行った結果、4因子が最も妥当であると判断された。当該因子の負荷量が.30とやや低い項目や、複数の因子に負荷量が高い項目もあったが、全体の項目内容や因子の負荷量を踏まえたうえで全ての項目を採用することとし、4因子で分析することにした。その結果、以下のような因子パターンが得られた（Table 3）。第1因子は、「できれば仕事はしたくない」「将来の生活については考えていない」など、仕事に就くことや将来について考えることに対して消極的な様を示す6項目で構成されていたため、「職業忌避」と命名した（ $\alpha = .71$ ）。第2因子は、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」「安定した職業生活を送りたい」など安定した職業生活を送ることを望む5項目から構成されていたため、「安定志向」と命名した（ $\alpha = .61$ ）。第3因子は、「一つの仕事にとどまらずいろいろな経験をしたい」「若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先したい」など自分のやりたいことを優先することを望む6項目から構成されていたため、「やりたいこと重視」と命名した（ $\alpha = .60$ ）。第4因子は、「ひとよりも高い収入を得たい」「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」など立身出世を望む3項目から構成されていたため、「出世願望」と命名した（ $\alpha = .65$ ）。

#### ②就職先を決定する際に重視すること

17項目について因子分析（主因子法・Promax回転）を行った結果、以下のような因子パターンが得られた（Table 4）。第1因子は、「能力を高める機会がある」「自分を活かせる」など、自分の能力を活かしたり高められたりすることや仕事そのものの意義に関する8項目で構成されていたため、「仕事のやりがい」と命名した（ $\alpha = .83$ ）。第2因子は、「業績や規模」「転勤がない」など職場の労働条件に関する9項目から構成されていたため、「労働条件」と命名した（ $\alpha = .77$ ）。

#### ③大学生活を通じて身につくと思う資質・能力

24項目について因子分析（主因子法・Promax回転）を行った結果、以下のような因子パターンが得られた（Table 5）。第1因子は、「他人とうまくやっていく力」「自己表現力」など適応に関わる能力を表す11項目で構成されていたため、「適応力」と命名した（ $\alpha = .88$ ）。第2因子は、「基本的なビジネスマナー」「ITを使いこなす力」など知識や技能に関する13項目から構成されていたため、「知識・技能」と命名した（ $\alpha = .87$ ）。

#### ④性格の認知（周りの人々からどのように思われていると思うか）

15項目について因子分析（主因子法・Promax回転）を行った結果、以下のような因子パターンが得られた（Table 6）。各因子名については、big fiveに該当するようにしてつけた。第1因子は、「不安になりやすい」「心配性」といった3項目で構成されていたため、「神経症的傾向」と命名した（ $\alpha = .84$ ）。第2因子は、「いい加減な」「ルーズな」といった3項目で構成されていたため、「勤勉性」と命名した（ $\alpha = .81$ ）。第3因子は、「話し好き」「陽気な」といった3項目で構成されていたため、「外向性」と命名した（ $\alpha = .80$ ）。第4因子は、「短気」「怒りっぽい」といった3項目で構成されていたため、「調和性」と命名した（ $\alpha = .75$ ）。第5因子は、「多才の」「独創的な」といった3項目で構成されていたため、「開放性」と命名した（ $\alpha = .55$ ）。

Table 3：将来の職業生活について考えていることの因子分析結果（主因子法，Promax 回転）

	I	II	III	IV
<b>I 職業忌避 (<math>\alpha=.71</math>)</b>				
できれば仕事はしたくない	.69	-.03	-.19	.17
将来の生活については考えていない	.62	.13	.08	-.05
あまりがんばって働かず、のんびり暮らしたい	.60	.09	.13	-.05
今の世の中、食べるのに困らないので定職には就きたくない	.46	-.12	.24	.09
自分に向いている仕事かわからない	.45	.42	-.08	-.06
将来のことを考えるより、今を楽しく生きたい	.35	-.04	.35	-.03
<b>II 安定志向 (<math>\alpha=.61</math>)</b>				
一つの企業に長く勤めるほうがよい	.08	.57	-.14	-.03
安定した職業生活を送りたい	.16	.57	.09	-.21
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	-.00	.52	-.08	.11
職業生活に役立つ資格を取りたい	-.03	.50	.07	.22
ひとの役に立つ仕事をしたい	-.22	.41	.37	.03
<b>III やりたいこと重視 (<math>\alpha=.60</math>)</b>				
1つの仕事にとどまらずいろいろな経験をしたい	-.05	-.01	.56	.10
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先したい	.19	-.08	.53	-.01
やりたい仕事なら正社員、フリーターにこだわらない	.04	-.23	.50	-.13
専門的な知識や技術を磨きたい	-.13	.18	.36	.20
仕事以外に自分の生きがいをもちたい	-.03	.25	.35	.01
自分に合わない仕事ならしたくない	.11	.02	.30	.04
<b>IV 出世願望 (<math>\alpha=.65</math>)</b>				
ひとよりも高い収入を得たい	.00	.20	-.11	.67
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	.16	-.18	.11	.65
有名になりたい	-.00	-.03	.13	.58
<b>因子間相関</b>				
I	—	-.18	.27	-.04
II		—	-.18	.06
III			—	.33
IV				—



Table 4: 就職先を決定する際に重視することの因子分析結果 (主因子法, Promax 回転)

	I	II
<b>I 仕事のやりがい (<math>\alpha=.83</math>)</b>		
能力を高める機会がある	.91	-.22
自分を活かせる	.88	-.21
専門的な知識や技能を活かせる	.66	-.05
仕事そのものに社会的意義がある	.53	.12
将来性がある	.52	.19
職場の雰囲気が良い	.51	.20
仕事の内容が良い	.44	.14
実際に働いている人の印象が良い	.36	.30
<b>II 労働条件 (<math>\alpha=.77</math>)</b>		
業績や規模	-.00	.67
転勤がない	-.17	.56
企業名等のブランド	.01	.54
福利厚生充実	.12	.53
育児休暇や介護休暇などの家庭配慮の制度	.07	.52
事業や雇用の安定性がある	.20	.47
通勤の便が良い	.02	.46
労働時間が短い	-.14	.45
収入が多い	.11	.44
因子間相関		.36

Table 5: 大学生活を通じて身につくと思う 資質・能力の因子分析結果 (主因子法, Promax 回転)

	I	II
<b>I 適応力 (<math>\alpha=.88</math>)</b>		
他人とうまくやっていく力	.92	-.23
幅広い人間力	.83	-.16
コミュニケーション能力	.70	-.10
自己表現力	.69	.00
協調性	.67	-.00
情報収集・探索能力	.59	.01
人を思いやる力	.56	.11
計画実行能力	.56	.16
責任感	.47	.25
選択能力	.46	.16
課題 (問題) 解決能力	.42	.21
<b>II 知識・技能 (<math>\alpha=.87</math>)</b>		
基本的なビジネスマナー	-.11	.76
社会人としての常識	.00	.70
IT を使いこなす力	-.20	.63
職業上、必要となる資格	-.05	.61
語学力	-.13	.60
専門的な職業能力	.09	.59
集中力	.11	.55
忍耐力	.12	.54
基礎的な学力	.03	.51
職業意識・勤労観	.12	.50
専門的な学問的知識	.08	.50
向上心・探究心	.34	.39
職業理解力	.21	.38
因子間相関		.57

Table 6：性格の認知の因子分析結果（主因子法，Promax 回転）

	I	II	III	IV	V
<b>I 神経症的傾向 (<math>\alpha=.84</math>)</b>					
不安になりやすい	.88	.05	-.06	.09	-.09
心配性	.82	-.05	.09	-.10	-.09
悩みがち	.78	-.03	-.05	-.04	.05
<b>II 勤勉性 (<math>\alpha=.81</math>)</b>					
いい加減な R	-.06	.85	.04	-.09	.02
ルーズな R	.03	.79	.02	-.06	-.03
怠惰な R	-.01	.72	-.06	.13	-.10
<b>III 外向性 (<math>\alpha=.80</math>)</b>					
話し好き	.10	-.01	.83	.07	.09
無口な R	.12	.06	-.79	-.05	.23
陽気な	-.00	.10	.68	-.08	.24
<b>IV 調和性 (<math>\alpha=.75</math>)</b>					
短気 R	.01	.03	-.01	.80	.20
温和な	.08	.08	-.08	-.72	.41
怒りっぽい R	.03	.05	-.03	.69	.26
<b>V 開放性 (<math>\alpha=.55</math>)</b>					
多才の	-.14	-.13	-.07	-.09	.78
進歩的	.11	-.03	.16	-.01	.52
独創的な	-.05	.06	.02	-.04	.45
<b>因子間相関</b>					
I	—	.06	-.08	.28	.29
II		—	.09	.28	.22
III			—	.08	.21
IV				—	.43
V					—

注) R が付いている項目は逆転項目。

### 3-4. 各従属変数の得点の記述統計

各従属変数の尺度得点の平均等を Table 7 に示す。「将来の職業生活について考えていること」について、安定志向 ( $M=3.35$ ) が相対的に高かった。職業忌避 ( $M=2.19$ ) は中立点の 2.5 未満であった。「将来の職業生活について考えていること」について、仕事のやりがい ( $M=4.29$ )、労働条件 ( $M=3.91$ ) とともに中立点の 3 よりも高かった。職業を避けるような考えは相対的に小さいこと、多くの者は仕事にやりがいや良い労働条件を

求め、かつ、安定を求めていることが分かる。「性格の認知」については、外向性 ( $M=3.57$ )、調和性 ( $M=3.48$ ) が相対的に高かった。

「自尊感情」の得点は、項目ごとの平均等も求めた (Table 8)。特に「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の項目が相対的に高いことが分かる ( $M=4.03$ )。この項目を除いても、項目によって中立点の 3 前後で差が見られていることが分かる ( $M=2.35 \sim 3.27$ )。

Table 7 : 各尺度得点の平均等

	<i>M</i>	<i>SD</i>	最小値	最大値
<b>将来の職業生活について考えていること</b>				
職業忌避	2.19	0.53	1.00	4.00
安定志向	3.35	0.45	1.20	4.00
やりたいこと重視	2.89	0.46	1.67	4.00
出世願望	2.60	0.68	1.00	4.00
<b>就職先を決定する際に重視すること</b>				
仕事のやりがい	4.29	0.51	1.75	5.00
労働条件	3.91	0.51	2.44	5.00
<b>大学生活を通じて身につくと思う資質・能力</b>				
適応力	3.13	0.48	1.91	4.00
知識・技能	2.74	0.48	1.15	4.00
自尊感情	2.71	0.44	1.00	4.20
<b>性格の認知</b>				
神経症的傾向	3.07	1.02	1.00	5.00
勤勉性	2.64	0.93	1.00	5.00
外向性	3.57	0.94	1.00	5.00
調和性	3.48	0.87	1.00	5.00
開放性	2.96	0.70	1.00	5.00

注：将来の職業生活について考えていること、大学生活を通じて身につくと思う資質・能力は4件法。  
それ以外の尺度は5件法。

Table 8 : 自尊感情各項目の平均等

	<i>M</i>	<i>SD</i>
少なくとも人並みには、価値のある人間である	2.37	1.02
色々な良い素質をもっている	2.63	0.96
敗北者だと思ふことがよくある	2.96	1.32
物事を人並みには、うまくやれる	2.35	0.95
自分には、自慢できるところがあまりない	3.15	1.12
自分に対して肯定的である	2.82	1.16
だいたいにおいて、自分に満足している	3.20	1.20
もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	4.03	1.03
自分は全くだめな人間だと思ふことがある	3.27	1.30
何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ	2.86	1.21

#### 4. 結果（時間の使い方の違いによる職業・学業・自己に対する意識の差異）

諸活動に費やす時間の長さの高・中・低群（「家で勉強している時間」に関しては高・低群）を独立変数、職業・学業・自己に対する意識の得点をそれぞれ従属変数とした1要因の分散分析あるいはt検定を行った。

##### 4-1. 大学にいる時間の長さの違いによる差異

大学にいる時間の長短によって職業に対する意識や自己評価が異なるのかどうかを検討するために、1要因の分散分析を行った。その結果、「将来の職業生活について考えていること」「就職先を決定する際に重視すること」「大学生活を通じて身につくと思う資質・能力」「自尊感情」「性格の認知」のいずれにおいても群間の有意な差はみられなかった（Table 9）。

##### 4-2. 家で勉強している時間の長さの違いによる差異

家で勉強している時間の長短によって職業に対する意識や自己評価が異なるのかどうかを検討するために、t検定を行った。結果をTable 10に示す。「大学生活を通じて身につくと思う資質・能力」について群間の有意な差がみられた。「知識・技能」において高群>低群であった（ $t(264)=2.10$ ,  $p<.05$ ）。「性格の認知」について群間の有意な差がみられた。「勤勉性」において高群>低群であった（ $t(261)=2.95$ ,  $p<.01$ ）。その他の従属変数においては、群間の有意な差はみられなかった。

##### 4-3. 家で家族と過ごす時間の長さの違いによる差異

家で家族と過ごす時間の長短によって職業に対する意識や自己評価が異なるのかどうかを検討するために、1要因の分散分析を行った。結果をTable 11に示す。「将来の職業生活について考えていること」「就職先を決定する際に重視するこ

と」「大学生活を通じて身につくと思う資質・能力」「自尊感情」「性格の認知」のいずれにおいても群間の有意な差はみられなかった。

##### 4-4. アルバイトをしている時間の長さの違いによる差異

アルバイトをしている時間の長短によって職業に対する意識や自己評価が異なるのかどうかを検討するために、1要因の分散分析を行った。結果をTable 12に示す。「将来の職業生活について考えていること」のうちの「安定志向」において、群の主効果が有意であった（ $F(2,264)=3.65$ ,  $p<.05$ ）。Tukey法による多重比較の結果、中群>低群であった。

「周りの人々からの認知」のうちの「勤勉性」において、群の主効果が有意であった（ $F(2,260)=3.55$ ,  $p<.05$ ）。Tukey法による多重比較の結果、低群>中群であった。

その他の従属変数においては、群間の有意な差はみられなかった。

##### 4-5. サークル等で活動している時間の長さの違いによる差異

サークル等で活動している時間の長短によって職業に対する意識や自己評価が異なるのかどうかを検討するために、1要因の分散分析を行った。結果をTable 13に示す。その結果、「将来の職業生活について考えていること」「就職先を決定する際に重視すること」「大学生活を通じて身につくと思う資質・能力」「自尊感情」「性格の認知」のいずれにおいても群間の有意な差はみられなかった。

##### 4-6. 友達と遊んでいる時間の長さの違いによる差異

友だちと遊んでいる時間の長短によって職業に対する意識や自己評価が異なるのかどうかを検討するために、1要因の分散分析を行った。結果をTable 14に示す。「将来の職業生活について考えていること」のうちの「やりたいこと重視」にお

いて、群の主効果が有意であった ( $F(2,262)=3.23, p<.05$ )。ただし、Tukey 法による多重比較の結果では群間の有意な差はみられなかった。「性格の認知」のうちの「外向性」において、群の主効果が有意であった ( $F(2,263)=5.31, p<.01$ )。Tukey 法による多重比較の結果、中群>低群であった。

その他の従属変数においては、群間の有意な差はみられなかった。

#### 4-7. 部屋で一人で過ごす時間の長さの違いによる差異

部屋で一人で過ごす時間の長短によって職業に対する意識や自己評価が異なるのかどうかを検討するために、1 要因の分散分析を行った。結果を Table 15 に示す。「将来の職業生活について考えていること」「就職先を決定する際に重視すること」「大学生生活を通じて身につくと思う資質・能力」「自尊感情」「性格の認知」のいずれにおいても群間の有意な差はみられなかった。

#### 4-8. 睡眠時間の長さの違いによる差異

睡眠時間の長短によって職業に対する意識や自己評価が異なるのかどうかを検討するために、1 要因の分散分析を行った。結果を Table 16 に示す。「性格の認知」のうちの「外向性」において、群の主効果が有意であった ( $F(2,263)=3.38, p<.05$ )。Tukey 法による多重比較の結果、低群>高群であった。その他の従属変数においては、群間の有意な差はみられなかった。

#### 4-9. その他の活動の時間の長さの違いによる差異

その他の時間(上記に挙げた8つ以外の活動に費やす時間)の長短によって職業に対する意識や自己評価が異なるのかどうかを検討するために、1 要因の分散分析を行った。結果を Table 17 に示す。「性格の認知」のうちの「調和性」において、群の主効果が有意であった

( $F(2,262)=3.72, p<.05$ )。Tukey 法による多重比較の結果、高群>低群であった。

その他の従属変数においては、群間の有意な差はみられなかった。

最後に、上記までの記述をまとめた表を作成した (Table 18)。

## 5. 考察

本研究の目的は、時間の使い方の違いによって、職業、学業、自己に対する意識が異なるのかを検討することであった。

### 5-1. 本研究から得られた結果とその解釈

本研究では以下の5点が明らかになった。

第一に、時間の使い方の違いによって、「就職先を決定する際に重視すること」「自尊感情」は差があるとはいえなかった。

第二に、「大学にいる時間」「家で家族と過ごす時間」「サークル等で活動している時間」「部屋で一人で過ごす時間」の使い方によって、職業、学業、自己に対する意識には差があるとはいえなかった。

第三に、「家で勉強している時間」「アルバイトをしている時間」「友達と遊んでいる時間」「睡眠時間」「その他の時間」のそれぞれの使い方によって「性格の認知(性格どのように思われていると思うか)」には差が見られた。

第四に、「アルバイトをしている時間」の使い方によって、「将来の職業生活について考えること」には差が見られた。

第五に、「家で勉強している時間」の使い方によって「大学生生活を通じて身につくと思う資質・能力」に差が見られた。

第一の結果については以下のように解釈できる。仕事にやりがいや良い労働条件を求め、かつ、安定を求めるのは、多くの者が持つ展望であり、現在の時間の使い方が影響しないような抽象度の高い展望ということなのであろう。

Table 9：大学にいる時間の低・中・高群における各変数の得点の平均等

		低群 n=75	中群 n=92	高群 n=102	F 値
<b>将来の職業生活について考えていること</b>					
職業忌避	<i>M</i>	2.15	2.20	2.18	0.20
	<i>SD</i>	0.61	0.48	0.52	
安定志向	<i>M</i>	3.31	3.34	3.38	0.47
	<i>SD</i>	0.44	0.43	0.49	
やりたいこと重視	<i>M</i>	2.90	2.89	2.87	0.10
	<i>SD</i>	0.44	0.41	0.51	
出世願望	<i>M</i>	2.64	2.58	2.57	0.27
	<i>SD</i>	0.69	0.64	0.71	
<b>就職先を決定する際に重視すること</b>					
仕事のやりがい	<i>M</i>	4.33	4.29	4.26	0.38
	<i>SD</i>	0.49	0.48	0.53	
労働条件	<i>M</i>	3.91	3.88	3.95	0.37
	<i>SD</i>	0.53	0.51	0.50	
<b>大学生活を通じて身につくと思う資質・能力</b>					
適応力	<i>M</i>	3.06	3.14	3.18	1.42
	<i>SD</i>	0.47	0.46	0.49	
知識・技能	<i>M</i>	2.68	2.78	2.75	0.91
	<i>SD</i>	0.49	0.47	0.44	
自尊感情	<i>M</i>	2.77	2.70	2.71	0.74
	<i>SD</i>	0.35	0.43	0.45	
<b>性格の認知</b>					
神経症的傾向	<i>M</i>	3.14	3.00	3.02	0.47
	<i>SD</i>	0.97	0.96	1.09	
勤勉性	<i>M</i>	2.67	2.70	2.60	0.33
	<i>SD</i>	0.88	0.90	1.00	
外向性	<i>M</i>	3.53	3.61	3.59	
	<i>SD</i>	0.95	0.94	0.97	0.17
調和性	<i>M</i>	3.47	3.53	3.47	
	<i>SD</i>	0.80	0.85	0.95	0.13
開放性	<i>M</i>	3.04	2.86	2.95	
	<i>SD</i>	0.67	0.63	0.74	1.49

注：将来の職業生活について考えていること、大学生活を通じて身につくと思う資質・能力は4件法。  
それ以外の尺度は5件法。

Table 10：家で勉強している時間の低・中・高群における各変数の得点の平均等

		低群 n=158	高群 n=111	t 値
<b>将来の職業生活について考えていること</b>				
職業忌避	<i>M</i>	2.21	2.14	0.98
	<i>SD</i>	0.48	0.60	
安定志向	<i>M</i>	3.32	3.39	-1.28
	<i>SD</i>	0.41	0.50	
やりたいこと重視	<i>M</i>	2.88	0.43	-0.03
	<i>SD</i>	2.89	0.50	
出世願望	<i>M</i>	2.59	0.63	-0.09
	<i>SD</i>	2.60	0.75	
<b>就職先を決定する際に重視すること</b>				
仕事のやりがい	<i>M</i>	4.25	4.34	-1.36
	<i>SD</i>	0.48	0.53	
労働条件	<i>M</i>	3.93	3.90	0.49
	<i>SD</i>	0.49	0.54	
<b>大学生活を通じて身につくと思う資質・能力</b>				
適応力	<i>M</i>	3.10	3.18	-1.41
	<i>SD</i>	0.45	0.51	
知識・技能	<i>M</i>	2.69	2.81	-2.10*
	<i>SD</i>	0.46	0.46	
自尊感情	<i>M</i>	2.77	2.67	1.82
	<i>SD</i>	0.35	0.49	
<b>性格の認知</b>				
神経症的傾向	<i>M</i>	3.00	3.12	-0.93
	<i>SD</i>	0.98	1.06	
勤勉性	<i>M</i>	2.51	2.85	2.95**
	<i>SD</i>	0.91	0.92	
外向性	<i>M</i>	3.61	3.55	0.49
	<i>SD</i>	0.92	1.00	
調和性	<i>M</i>	3.48	3.50	0.24
	<i>SD</i>	0.86	0.90	
開放性	<i>M</i>	2.92	2.98	-0.65
	<i>SD</i>	0.67	0.71	

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ 

注：将来の職業生活について考えていること、大学生活を通じて身につくと思う資質・能力は4件法。  
それ以外の尺度は5件法。

Table 11：家で家族と過ごす時間の低・中・高群における各変数の得点の平均等

		低群 n=95	中群 n=83	高群 n=91	F 値
<b>将来の職業生活について考えていること</b>					
職業忌避	<i>M</i>	2.17	2.17	2.19	0.02
	<i>SD</i>	0.58	0.52	0.49	
安定志向	<i>M</i>	3.35	3.29	3.39	1.00
	<i>SD</i>	0.50	0.49	0.35	
やりたいこと重視	<i>M</i>	2.89	2.95	2.81	2.01
	<i>SD</i>	0.49	0.41	0.46	
出世願望	<i>M</i>	2.73	2.52	2.52	2.89
	<i>SD</i>	0.64	0.65	0.73	
<b>就職先を決定する際に重視すること</b>					
仕事のやりがい	<i>M</i>	4.32	4.28	4.27	0.24
	<i>SD</i>	0.49	0.56	0.47	
労働条件	<i>M</i>	3.95	3.85	3.93	0.89
	<i>SD</i>	0.51	0.54	0.49	
<b>大学生活を通じて身につくと思う資質・能力</b>					
適応力	<i>M</i>	3.16	3.16	3.08	0.66
	<i>SD</i>	0.53	0.46	0.44	
知識・技能	<i>M</i>	2.77	2.71	2.72	0.42
	<i>SD</i>	0.50	0.49	0.41	
自尊感情	<i>M</i>	2.75	2.72	2.70	0.22
	<i>SD</i>	0.45	0.46	0.33	
<b>性格の認知</b>					
神経症的傾向	<i>M</i>	3.15	2.98	3.00	0.80
	<i>SD</i>	1.06	0.99	0.99	
勤勉性	<i>M</i>	2.53	2.65	2.78	1.64
	<i>SD</i>	0.94	0.84	0.98	
外向性	<i>M</i>	3.59	3.54	3.60	0.10
	<i>SD</i>	0.96	0.99	0.91	
調和性	<i>M</i>	3.32	3.61	3.55	2.76
	<i>SD</i>	0.84	0.79	0.96	
開放性	<i>M</i>	2.98	3.01	2.84	1.66
	<i>SD</i>	0.72	0.66	0.66	

注：将来の職業生活について考えていること、大学生活を通じて身につくと思う資質・能力は4件法。  
それ以外の尺度は5件法。



Table 12：アルバイトをしている時間の低・中・高群における各変数の平均等

		低群 n=84	中群 n=64	高群 n=121	F 値	多重比較
<b>将来の職業生活について考えていること</b>						
職業忌避	<i>M</i>	2.14	2.23	2.18	0.48	
	<i>SD</i>	0.54	0.53	0.53		
安定志向	<i>M</i>	3.25	3.45	3.35	3.65*	中>低
	<i>SD</i>	0.54	0.38	0.41		
やりたいこと重視	<i>M</i>	2.86	2.94	2.87	0.67	
	<i>SD</i>	0.51	0.43	0.43		
出世願望	<i>M</i>	2.55	2.52	2.66	1.15	
	<i>SD</i>	0.74	0.66	0.65		
<b>就職先を決定する際に重視すること</b>						
仕事のやりがい	<i>M</i>	4.24	4.33	4.30	0.65	
	<i>SD</i>	0.56	0.50	0.47		
労働条件	<i>M</i>	3.88	3.89	3.95	0.65	
	<i>SD</i>	0.51	0.47	0.53		
<b>大学生活を通じて身につくと思う資質・能力</b>						
適応力	<i>M</i>	3.10	3.23	3.10	1.76	
	<i>SD</i>	0.52	0.45	0.45		
知識・技能	<i>M</i>	2.74	2.72	2.74	0.06	
	<i>SD</i>	0.52	0.43	0.45		
自尊感情	<i>M</i>	2.74	2.67	2.74	0.63	
	<i>SD</i>	0.47	0.41	0.37		
<b>性格の認知</b>						
神経症的傾向	<i>M</i>	3.06	3.07	3.02	0.07	
	<i>SD</i>	1.01	1.08	0.98		
勤勉性	<i>M</i>	2.84	2.43	2.64	3.55*	低>中
	<i>SD</i>	1.00	0.84	0.90		
外向性	<i>M</i>	3.51	3.69	3.58	0.65	
	<i>SD</i>	1.05	0.81	0.95		
調和性	<i>M</i>	3.59	3.37	3.48	1.10	
	<i>SD</i>	0.79	0.97	0.88		
開放性	<i>M</i>	2.96	2.93	2.94	0.04	
	<i>SD</i>	0.73	0.71	0.65		

\* p&lt;.05

注：将来の職業生活について考えていること、大学生活を通じて身につくと思う資質・能力は4件法。  
それ以外の尺度は5件法。

Table 13：サークル等で活動している時間の低・中・高群における各変数の平均等

		低群 n=145	中群 n=76	高群 n=48	F 値
<b>将来の職業生活について考えていること</b>					
職業忌避	<i>M</i>	2.14	2.19	2.27	1.14
	<i>SD</i>	0.51	0.48	0.66	
安定志向	<i>M</i>	3.35	3.28	3.42	1.37
	<i>SD</i>	0.44	0.47	0.45	
やりたいこと重視	<i>M</i>	2.84	2.92	2.94	1.22
	<i>SD</i>	0.44	0.48	0.49	
出世願望	<i>M</i>	2.57	2.57	2.73	1.13
	<i>SD</i>	0.66	0.65	0.77	
<b>就職先を決定する際に重視すること</b>					
仕事のやりがい	<i>M</i>	4.27	4.24	4.42	2.08
	<i>SD</i>	0.53	0.46	0.47	
労働条件	<i>M</i>	3.92	3.85	3.98	1.08
	<i>SD</i>	0.51	0.48	0.54	
<b>大学生活を通じて身につくと思う資質・能力</b>					
適応力	<i>M</i>	3.12	3.13	3.17	0.21
	<i>SD</i>	0.47	0.46	0.54	
知識・技能	<i>M</i>	2.74	2.70	2.78	0.41
	<i>SD</i>	0.44	0.46	0.54	
自尊感情	<i>M</i>	2.73	2.77	2.65	1.21
	<i>SD</i>	0.41	0.35	0.51	
<b>性格の認知</b>					
神経症的傾向	<i>M</i>	3.08	2.97	3.06	0.30
	<i>SD</i>	1.09	0.92	0.92	
勤勉性	<i>M</i>	2.61	2.76	2.59	0.76
	<i>SD</i>	0.95	0.91	0.89	
外向性	<i>M</i>	3.52	3.65	3.66	0.70
	<i>SD</i>	0.99	0.92	0.88	
調和性	<i>M</i>	3.42	3.58	3.54	0.93
	<i>SD</i>	0.87	0.89	0.87	
開放性	<i>M</i>	2.91	2.98	2.99	0.42
	<i>SD</i>	0.66	0.71	0.75	

注：将来の職業生活について考えていること、大学生活を通じて身につくと思う資質・能力は4件法。

それ以外の尺度は5件法。

Table 14: 友達と遊んでいる時間の低・中・高群における各変数の平均等

		低群 n=90	中群 n=112	高群 n=67	F 値	多重比較
<b>将来の職業生活について考えていること</b>						
職業忌避	<i>M</i>	2.16	2.16	2.23	0.36	
	<i>SD</i>	0.53	0.53	0.53		
安定志向	<i>M</i>	3.37	3.34	3.32	0.18	
	<i>SD</i>	0.44	0.46	0.47		
やりたいこと重視	<i>M</i>	2.82	2.97	2.84	3.23*	n.s.
	<i>SD</i>	0.47	0.44	0.46		
出世願望	<i>M</i>	2.56	2.64	2.56	0.47	
	<i>SD</i>	0.64	0.69	0.72		
<b>就職先を決定する際に重視すること</b>						
仕事のやりがい	<i>M</i>	4.28	4.34	4.21	1.50	
	<i>SD</i>	0.59	0.44	0.48		
労働条件	<i>M</i>	4.01	3.86	3.88	2.35	
	<i>SD</i>	0.47	0.55	0.48		
<b>大学生活を通じて身につくと思う資質・能力</b>						
適応力	<i>M</i>	3.10	3.16	3.13	0.35	
	<i>SD</i>	0.48	0.47	0.49		
知識・技能	<i>M</i>	2.72	2.78	2.69	0.91	
	<i>SD</i>	0.47	0.47	0.45		
自尊感情	<i>M</i>	2.75	2.72	2.69	0.30	
	<i>SD</i>	0.46	0.38	0.41		
<b>性格の認知</b>						
神経症的傾向	<i>M</i>	2.93	3.11	3.10	0.87	
	<i>SD</i>	1.10	0.95	0.97		
勤勉性	<i>M</i>	2.59	2.73	2.61	0.61	
	<i>SD</i>	0.94	0.96	0.84		
外向性	<i>M</i>	3.33	3.76	3.63	5.31**	中>低
	<i>SD</i>	0.97	0.97	0.82		
調和性	<i>M</i>	3.55	3.49	3.41	0.52	
	<i>SD</i>	0.91	0.92	0.73		
開放性	<i>M</i>	2.93	2.98	2.90	0.31	
	<i>SD</i>	0.67	0.69	0.71		

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ 

注：将来の職業生活について考えていること、大学生活を通じて身につくと思う資質・能力は4件法。  
それ以外の尺度は5件法。

Table 15 : 部屋で一人で過ごす時間の低・中・高群における各変数の平均等

		低群 n=125	中群 n=65	高群 n=79	F 値
<b>将来の職業生活について考えていること</b>					
職業忌避	<i>M</i>	2.15	2.18	2.22	0.51
	<i>SD</i>	0.52	0.54	0.54	
安定志向	<i>M</i>	3.36	3.31	3.35	0.26
	<i>SD</i>	0.45	0.40	0.50	
やりたいこと重視	<i>M</i>	2.89	2.85	2.89	0.18
	<i>SD</i>	0.43	0.48	0.48	
出世願望	<i>M</i>	2.58	2.49	2.70	1.81
	<i>SD</i>	0.70	0.66	0.65	
<b>就職先を決定する際に重視すること</b>					
仕事のやりがい	<i>M</i>	4.31	4.22	4.31	0.81
	<i>SD</i>	0.54	0.45	0.49	
労働条件	<i>M</i>	3.88	3.94	3.94	0.42
	<i>SD</i>	0.57	0.47	0.45	
<b>大学生活を通じて身につくと思う資質・能力</b>					
適応力	<i>M</i>	3.16	3.08	3.14	0.56
	<i>SD</i>	0.49	0.43	0.49	
知識・技能	<i>M</i>	2.73	2.69	2.79	0.73
	<i>SD</i>	0.48	0.39	0.50	
自尊感情	<i>M</i>	2.72	2.69	2.76	0.58
	<i>SD</i>	0.41	0.38	0.45	
<b>性格の認知</b>					
神経症的傾向	<i>M</i>	2.97	3.09	3.14	0.81
	<i>SD</i>	1.00	0.97	1.05	
勤勉性	<i>M</i>	2.69	2.81	2.46	2.85
	<i>SD</i>	0.87	0.99	0.94	
外向性	<i>M</i>	3.67	3.59	3.42	1.70
	<i>SD</i>	0.93	0.89	1.01	
調和性	<i>M</i>	3.51	3.63	3.33	2.16
	<i>SD</i>	0.91	0.77	0.88	
開放性	<i>M</i>	2.92	3.02	2.92	0.48
	<i>SD</i>	0.65	0.67	0.75	

注：将来の職業生活について考えていること、大学生活を通じて身につくと思う資質・能力は4件法。

それ以外の尺度は5件法。

Table 16：睡眠時間の低・中・高群における各変数の平均等

		低群 n=72	中群 n=127	高群 n=70	F 値	多重比較
<b>将来の職業生活について考えていること</b>						
職業忌避	<i>M</i>	2.12	2.22	2.15	1.00	
	<i>SD</i>	0.52	0.50	0.59		
安定志向	<i>M</i>	3.43	3.35	3.25	2.63	
	<i>SD</i>	0.36	0.46	0.52		
やりたいこと重視	<i>M</i>	2.78	2.94	2.89	2.74	
	<i>SD</i>	0.47	0.41	0.51		
出世願望	<i>M</i>	2.57	2.63	2.56	0.31	
	<i>SD</i>	0.73	0.63	0.72		
<b>就職先を決定する際に重視すること</b>						
仕事のやりがい	<i>M</i>	4.29	4.31	4.24	0.43	
	<i>SD</i>	0.48	0.42	0.65		
労働条件	<i>M</i>	3.97	3.92	3.84	1.05	
	<i>SD</i>	0.51	0.46	0.59		
<b>大学生活を通じて身につくと思う資質・能力</b>						
適応力	<i>M</i>	3.17	3.12	3.11	0.38	
	<i>SD</i>	0.51	0.44	0.51		
知識・技能	<i>M</i>	2.76	2.77	2.65	1.61	
	<i>SD</i>	0.47	0.43	0.51		
<b>自尊感情</b>						
	<i>M</i>	2.75	2.72	2.70	0.19	
	<i>SD</i>	0.38	0.36	0.53		
<b>性格の認知</b>						
神経症的傾向	<i>M</i>	2.95	3.09	3.08	0.47	
	<i>SD</i>	1.05	0.93	1.12		
勤勉性	<i>M</i>	2.71	2.74	2.43	2.70	
	<i>SD</i>	0.95	0.90	0.93		
外向性	<i>M</i>	3.81	3.55	3.41	3.38 *	低>高
	<i>SD</i>	0.86	0.90	1.09		
調和性	<i>M</i>	3.54	3.47	3.47	0.15	
	<i>SD</i>	0.83	0.92	0.85		
開放性	<i>M</i>	2.92	2.94	2.96	0.06	
	<i>SD</i>	0.66	0.59	0.85		

\* $p<.05$ 

注：将来の職業生活について考えていること、大学生活を通じて身につくと思う資質・能力は4件法。  
それ以外の尺度は5件法。

Table 17：その他の時間の低・中・高群における各変数の平均等

		低群 n=138	中群 n=84	高群 n=47	F 値	多重比較
<b>将来の職業生活について考えていること</b>						
職業忌避	<i>M</i>	2.19	2.12	2.26	1.09	
	<i>SD</i>	0.56	0.42	0.61		
安定志向	<i>M</i>	3.40	3.27	3.34	2.17	
	<i>SD</i>	0.41	0.51	0.48		
やりたいこと重視	<i>M</i>	2.87	2.89	2.91	0.09	
	<i>SD</i>	0.47	0.44	0.46		
出世願望	<i>M</i>	2.63	2.55	2.59	0.36	
	<i>SD</i>	0.69	0.65	0.72		
<b>就職先を決定する際に重視すること</b>						
仕事のやりがい	<i>M</i>	4.29	4.27	4.33	0.24	
	<i>SD</i>	0.47	0.55	0.53		
労働条件	<i>M</i>	3.92	3.93	3.87	0.22	
	<i>SD</i>	0.52	0.44	0.59		
<b>大学生生活を通じて身につくと思う資質・能力</b>						
適応力	<i>M</i>	3.15	3.14	3.08	0.38	
	<i>SD</i>	0.47	0.47	0.53		
知識・技能	<i>M</i>	2.77	2.70	2.71	0.60	
	<i>SD</i>	0.46	0.40	0.58		
自尊感情	<i>M</i>	2.72	2.74	2.72	0.08	
	<i>SD</i>	0.42	0.41	0.41		
<b>性格の認知</b>						
神経症的傾向	<i>M</i>	3.15	2.87	3.07	1.94	
	<i>SD</i>	1.04	0.98	0.96		
勤勉性	<i>M</i>	2.62	2.69	2.66	0.15	
	<i>SD</i>	0.93	0.90	0.98		
外向性	<i>M</i>	3.60	3.59	3.51	0.14	
	<i>SD</i>	0.90	1.04	0.95		
調和性	<i>M</i>	3.42	3.43	3.80	3.72 *	高>低
	<i>SD</i>	0.86	0.94	0.74		
開放性	<i>M</i>	2.97	2.92	2.92	0.16	
	<i>SD</i>	0.75	0.62	0.61		

\* $p < .05$ 

注：将来の職業生活について考えていること、大学生生活を通じて身につくと思う資質・能力は4件法。  
それ以外の尺度は5件法。

Table 18：時間の使い方の違いによる職業・学業・自己に対する意識の差異の一覧

	将来の職業生活	就職先決定時の重視	身につくと思う 資質・能力	自尊感情	性格の認知
大学にいる時間（通学時間含む）					
家で勉強している時間			「知識・技能」 高群>低群		「勤勉性」 高群>低群
家で家族と過ごす時間					
アルバイトをしている時間	「安定志向」 中群>低群				「勤勉性」 低群>中群
サークル等で活動している時間					
友達と遊んでいる時間					「外向性」 中群>低群
部屋で一人で過ごす時間					
睡眠時間					
その他の時間					「調和性」 高群>低群

なお、「自尊感情」については、項目ごとに得点のばらつきが大きかった。「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の項目が相対的に高く、その他の項目も差が見られた。「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の項目は、因子への負荷が低いという独自性を持つことが、我が国の大学生を対象にした研究でも報告されている（e.g., 伊藤・小玉, 2006）。本研究ではこの項目の平均が相対的に高かった。大学1年生ということもあり、これからの大学生活を通じて成長をしていきたいという期待を示しているのであろう。今回の分析ではすべての項目を合算して分析したため、このような項目の独自性がなくなり、有意差が見られなかったのかもしれない。ただし、このことについての確証はない。単に、時間の使い方と「自尊感情」には関係がないのかもしれない。

第二の結果については次のように考えられる。まず、「大学にいる時間」と「部屋で一人で過ごす時間」については、その場所で何を行っているのかという活動内容がさまざまであるといえる。次に、「家で家族と過ごす時間」については、一人暮らしの者など家族と過ごす時間がなかなかとれない者がいる。「サークル等で活動している時

間」については、サークルの種類によってその活動内容が大きく異なっていることがある。一口にサークルといっても運動系と文化系、活発なところとそうでないところがある。これらのような要因が関係して群間の差がみられなかったのではないだろうか。

第三の結果、すなわち、時間の使い方によって「性格の認知」について多くの有意な差がみられたことは、どのような解釈ができるであろうか。これは、特定の性格の人が特定の活動を多く行う傾向があるともいえるし、特定の活動においては特定の性格をもつ人が集まりやすいということを示しているのかもしれない。

第四の結果、すなわち、アルバイトをあまりしていない者よりも、ある程度している者のほうが職業生活に安定を求めていたことについては以下のように考えられる。アルバイトをある程度したということは、大学生活において自分で一定程度稼いだ経験があることを示している。このような経験により金銭感覚がある程度身についたことが影響していると考えられるであろう。アルバイトを多くする者との間に差が見られなかったのは、あまりにもアルバイトを志向するタイプの学生は金銭感覚が異なる可能性や、安定よりもリスクを

冒して行動できるようなことを志向している可能性がある。

第五の結果については、日常的に勉強しているから知識や技能が身についていると実感していると解釈できるが、知識や技能を身につけられると期待しているから勉強を積極的に行っている可能性もあることには注意が必要であろう。一方で、適応力（「他人とうまくやっていく力」「幅広い人間力」「コミュニケーション能力」などから構成）には差が見られなかったのは、勉強のみではなく、他の活動からでも学べると大学生自身が思っているのかもしれない。

以上の結果については、本研究のデータに基づいた群分けによる分析から得られたものであり、一定の限界がある。ここで得られた知見をさらに検証していく必要があるだろう。

## 5-2. 本研究で得られた知見と今後の課題

本研究の結果より、大学生の普段の時間の使い方によって、進路に関する意識や大学での学びに対する見方、自己認識が異なることが示唆される。このような知見は、どのような学生がどのような活動をどのくらい行っているのかということ把握する端緒となり、学生のタイプに合わせたより具体的な支援体制を構築することにもつながると考えられる。

今後の課題としては、以下に述べる3点が挙げられる。

まず、時間の使い方と他の変数の関係の方向性である。本稿では、時間の使い方を独立変数、他の変数を従属変数として分析した。しかし、両者が因果関係にあるのか相互作用関係にあるのか、お互いにどのような影響を与えうるのかといったことについては分析できなかった。今後は理論的背景を踏まえながら、変数間の影響について明らかにしていく必要がある。

次に、大学生が「いつ、誰と、どこで、何をしているのか」をより詳しく探っていく必要がある。近年さかんに行われている居場所研究におい

ては、居場所の概念がだんだんと拡大されている。石本（2009）によれば、居場所という言葉は、一般的には「快感情を伴う場所、時間、人間関係等」を意味することが多いという。時間の使い方について今後分析を進めていくうえでも、このような広い意味での居場所の概念を踏まえて、場所や人間関係をより詳細に区分していくことが求められる。例えば、大学で過ごしている時間にして、図書館で勉強していたり、友人と学生食堂で喋っていたりというようにその中身は多様であろう。

最後に、各活動についての「個人の世界における意味づけ」（溝上，2001）を明らかにすることである。今回は単純に各活動に費やす時間の長さによって分析を行ったが、今後はその個人にとって重要な活動とそうでない活動について検討してみることも必要であろう。自己評価に関する研究（e.g., 高坂，2008）でも個人にとっての重要な領域によって自己評価が変わりうることが示唆されている。同じ活動に同じだけの時間を費やしていても、その個人にとってその活動がどれだけ重要であるかによって、異なる様相を見せうると考えられる。

## 引用文献・参考文献

- 馬場久志 2004 学びと時間 心理科学研究会編 『心理科学への招待—人間発達における時間とコミュニケーション—』有斐閣, pp.15-28.
- ベネッセ教育研究開発センター 2009 大学生の学習・生活実態調査報告書.
- 浜谷直人 2004 豊かな時間体験を生きる/体験を分節化して歴史をつくる 心理科学研究会編 『心理科学への招待—人間発達における時間とコミュニケーション—』有斐閣, pp.12-13.
- 伊藤正哉・小玉正博 2006 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討：本来感、自尊感情ならびにその随伴性に注目して 教育心理学研究, 54(2), 222-232.
- 石本雄真 2009 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究所



- 研究紀要, 3, 93-100.
- NHK 放送文化研究所 2006 2005年国民生活時間調査報告書
- 高坂康雄 2008 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的变化 教育心理学研究、56、218-229.
- 溝上慎一 2004 現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる— NHK ブックス.
- 溝上慎一 2006 大学生の学び・入門—大学での勉強は役に立つ!— 有斐閣アルマ.
- 溝上慎一編 2001 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学— ナカニシヤ出版.
- 野々村新 2001 学生相談所を中心にした進路相談

吉田辰雄編 『21世紀の進路指導辞典』ブレーン出版, pp.296-297.

Rosenberg, M, 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton,N.J. : Princeton University Press.

都筑学 1999 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

#### 謝辞

法政大学FDセンター・「特色あるFDへの取り組み助成金」の支援を受けている。ここに記して感謝を申し上げたい。

---

## Relationships between the use of time in daily life and the attitude of university students towards vocation, schoolwork, and self

MINEO Naoko  
TAZAWA Minoru  
UMEZAKI Osamu

---

This study aimed to investigate relationships between the use of time in daily life and the attitude of university students towards vocation, schoolwork, and self. The participants were 269 university freshmen (107 males, 161 females, and 1 unknown). They were asked how they spent their time in a day. Two or three groups were identified according to the time spent for each activity. Tests on the differences between the means revealed the following: (a) Considering the time spent for 'studying at home', 'working part-time', 'playing

with friends', 'sleeping', and 'doing other activities', the students' 'awareness of personality' was different. (b) Given the time spent for 'working part-time' and 'playing with friends', the students' 'views about one's future career' were different. (c) On the basis of the time spent for 'studying at home', the students' 'thoughts on the abilities that one expects to acquire through university life' were different. Thus, the results indicated that the use of time in daily life was related to one's attitude towards vocation, schoolwork, and self.